

貴志川上流域を中心として

和歌山信愛女短大 千森 督子

1. 目的 第1報では海草郡美里町と有田郡金屋町を中心に発表を行なったが，本稿では貴志川上流で「だいどころ」が張り出す特徴ある間取形式が多くみられた事に注目し，さらに上流の未調査地域を対象に考察をすすめてみた。
2. 方法 調査方法は前報と同様で，調査年月は平成元年8月—11月である。調査地域は有田川や紀ノ川上流域との接合点で海草郡，伊都郡，那賀郡にまたがる。集落は標高500—600mの山間を流れている貴志川の本，支流沿いに点在している。かなり茅葺家屋が残存しているので，茅葺家屋のみ15軒を対象にとりあげた。
3. 結果 地形上敷地形態は横長になる場合が多く，付属屋は主屋を中心に並列に配置されている。主屋の出入口はすべて平入りであるが，必ずしも南入りではない。屋根は卯立造り，入母屋形式であるが現在は四方に瓦やトタンで庇を出す形態が多い。建築年代は推定ではあるが，江戸末期から明治期にかけてである。主屋内の床上部分は前報同様「だいどころ」が張り出す形式が多い。前広間三間取に「だいどころ」が張り出す形態もみられたが，多くは整形四間取や食違い四間取に「だいどころ」が張り出す五間取である。この場合部屋の呼び名は前列土間側から「しものま」「かみのま」，後列は「だいどころ」「なんど」「かいしょ」である。「かいしょ」は私的空間で，就寝空間として使われている。土間の必要性が低下した現在，床上部分の拡張が目立つ。「しものま」の下手に付設されている2—3畳の上がり口の間が特徴的である。土間境とは建具のない開放的な造りで接客，対応の場ともなっている。